

§ 4 まとめ

都市部における過密化がますます進む現在、都市の機能性・安全性・快適性を向上させる事が将来へ向けての緊急課題となっている。現状の都市機能を維持しつつ、それらの問題を解決する必要がある、その有効な手段が人工地盤の活用と言える。建築物であるビルディングも多層の人工的なフロアとしてそれぞれ単独に建設されているに過ぎず、長期的な都市計画に基づいて建設されているとは言いがたい。そこで、都市のなかでも空間の有効利用が計れる部分として点的な交差点・駅、線的な道路・河川、面的な大規模跡地・再開発地域を対象にケーススタディを行った。

現在、社会基盤の整備にあたり用地費の高騰と代替え用地の制約が問題となり、開発は遅々として進まない状態である。そこで、人工地盤を活用し、限られた空間の有効利用を計ることにより開発が必要となる。

今後、鋼構造関係者は、都市建設の一部に関わるばかりでなく、鋼構造物のメリットを十分に活かした都市構造を提案していく事が必要不可欠と考える。そのためには、開発理念・法制度面・技術面について積極的に勉強し、我々自身の力を養う努力を怠ってはならないことを痛感した。

生前の川口先生は土地の開発と利用について盛んに現状を憂いておられ、近い将来必ず人工地盤を始めとする解決手段が必要となることを確信しておられた事を今思い出す次第である。

研究部会活動時、我々鋼橋関係の設計実務者は、しばしば大局的な視野に欠け、細部にこだわるばかりであったが先生には何度も軌道修正をして戴いた。また、先生には人工地盤の施工場所への見学・発注側への訪問等でも各グループのメンバーと一緒にショルダーバッグ一つで気軽に同行して戴いた。

現時点では将来への夢であっても人間を優先しつつ限られた空間の有効利用を計る事例を提案し、今後の出発点にしようと考えたのが本報告書である。最後に当研究に当たって御協力を戴いた関係各位、部会員、日本大学交通土木工学科学学生諸君に感謝いたします。